



医療法人財団 織本病院 広報誌

9

月刊 織本

2022年9月1日 vol.337

発行 医療法人財団 織本病院
 印刷 〒204-0002
 東京都清瀬市旭が丘1-261
 TEL 042-491-2121
 URL <https://orimoto-hp.com/>
 発行人 高木 由利



タカサゴユリ

一通の報告書



理事長 高木 由利

夏が終わるとすぐに秋を感じさせてくれる日本は、本当にステキな国だと感じています。

* * *

8月末に私が支援させて頂いている「国境なき医師団」から報告書が届きました。ウクライナでの緊急援助活動の報告書でした。幼い子供のいる、ある救命救急医が書かれたものでした。ウクライナへの緊急援助活動に参加したいが家族のこともあり悩んだ末、ご家族の後押しのおかげで日本を出発されたとのことでした。情勢の不安定さ理不尽さに心が動揺するある日、「日本は平和であってほしい」と語るウクライナの人々のことばに深く感動し、医療活動を行っているとのことでした。

今から30年以上前、私が未だ30才代の頃でした。私宛に一通の手紙が“国境なき医師団”から届いたのです。その手紙は、「中東の女性達は男性医師には体を見せないため、何かあっても診察も治療も難しい。あなたのように内科も外科も手掛ける女性医師がどうしても必要だ。」というような内容でした。丁度その

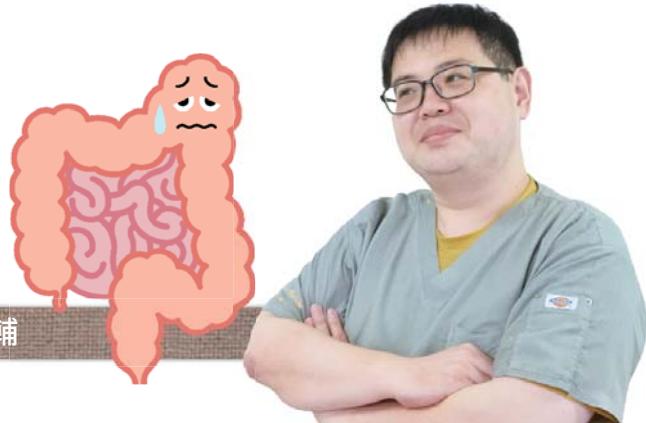
頃私は自分の望んだ仕事が自由にできず悩んでいた時で、この手紙に強く心を動かされ毎日何回も手紙を読み返していました。しかしある夜、当時小学校低学年だった2人の年子の息子達の可愛い寝顔を見ながら涙がポロポロこぼれ、やはり私は息子達を置いて海外活動はできないと考え、お手紙を下さった先生に下手な英語で返事を書いたことを思い出しました。その日から、自分は行かれないから、せめて少しでも経済支援をしようと決心し現在に至っています。20代、30代、40代の医師を中心とするこの世界的な医療活動は、本当に価値ある命の支援だと思います。そしてその活動範囲がどんどん広がっていることは、それだけ地球上の人々が自然災害だけでなく人道危機に瀕していることを痛感しています。

皆様も国境なき医師団、国連難民高等弁務官、ユニセフなど多くの支援団体の活動を応援して頂きたいと願っています。

ちょう へい そく

腸閉塞の しくみと治療

消化器内科 医局長 島田 祐輔



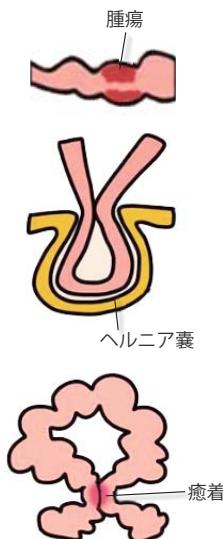
織本病院は長い歴史がありますが、建物は増築・改築を繰り返してきたため構造が複雑で、（特に私が検査を行っている内視鏡室は一番奥にあり）来院される方にも分かりにくいことがあったかと思います。本号が出る頃には現病院での診療も残りわずかと思われますが、そんな「工事をしたことで動線が混乱する」ことは人体でも起こります。その代表的なもので、当院でも入院治療を行っている疾患として『腸閉塞』があります。

腸閉塞とは？

腸閉塞は、その名の通り腸が閉塞して通過障害を起こしてしまうもので、腹痛や嘔吐で発症します。重症化すると腸の壊死・破裂まで進行して緊急手術が必要になります。脱水や誤嚥性肺炎を合併しても致命的となりうる、結構怖い疾患です。

腸閉塞の原因

原因は腫瘍やヘルニア、食品（特に餅）などでも起こりますが、最も多いのは外科手術後の癒着によるものです。本来、腸は腸間膜でゆるく固定されており、絶えず動いて内容物を先に送りつつも、ねじれたり詰まつたりはしないような形状になっています。しかし腹部の手術を行うと腸の表面に微小な傷がつき、傷が治る過程で隣り合った腸や腹膜と癒着が起こります。術中癒着防止フィルムの使用や腹腔鏡による低侵襲手術の普及、術後の早期離床の推奨など十分な対策は行われるようになったものの、癒着をゼロにすることはできません。特に一刻一秒を争う緊急手術や、炎症が広範囲に広がっていた事例では術後癒着のリスクは高まります。癒着のために腸がヘアピン状



の屈曲を作ったり、癒着部を支点にしてねじれてしまったり、癒着組織が作ったヒモ状の構造物に締め付けられたりすると、内容物の動きによっては閉塞が起こってしまうのです。

癒着性腸閉塞の治療

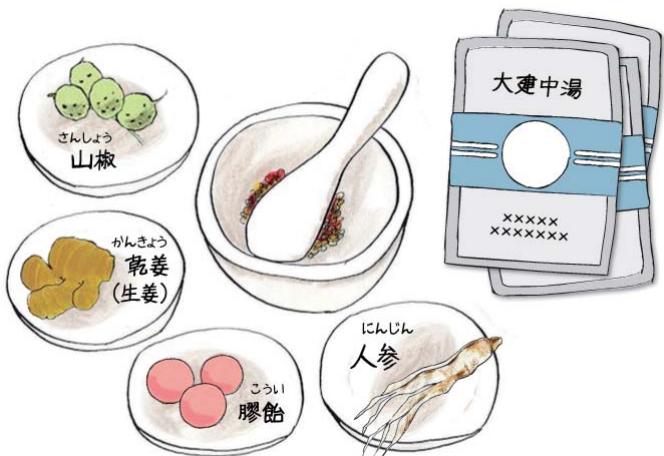
癒着性腸閉塞の根本的な解決策は外科的に癒着を剥離することです。しかし患者さんは癒着対策が不十分な時代に手術が行われた高齢の方が多く、また癒着剥離術自体でも術後癒着を来たすことがあります。あくまで内科的治療が無効な場合や再発を繰り返す場合の最後の切り札です。そのため、基本的には内科で保存的に治療することになります。

内科的治療の基本は腸管減圧と輸液になります。腸管減圧は溜まった内容物をチューブで体外に排液することで腸の緊張を解除する処置です。突然ですが、細長い風船でいろいろな物を作るバルーンアートを想像してみてください。パンパンに張った風船をひねるとその状態で固定されますが、しづんだ風船をひねってもゴムの弾力で自然に戻ります。同じ原理で、圧力を下げることで腸の自然整復を期待するのがこの治療になります。軽度なもの、閉塞が上方にあるものは鼻から胃に50cm前後のチューブを挿入するだけで軽快することも多いです。しかし閉塞が下腹部にある場合は胃周辺の排液だけでは不十分で、1メートル以上のチューブをX線透視下に小腸まで挿入し、以後は腸の流れに乗せて奥の方まで減圧を続けることになります。排便があり、レントゲン上も閉塞所見が消失したらチューブを抜き、食事を開始します。だいたい1～2週間程度の入院となることが多いです。



再発予防策

症状が軽快しても癒着は残っているので、以後も腸閉塞再発の恐れはあります。再発予防策ですが、一度に食べ過ぎない、適度に運動して腸を動かす習慣をつけるといった一般的な事項のほか、漢方薬である大建中湯の有効性が広く知られています。大建中湯は高麗人参・生姜・山椒・水飴といった割と日常的な食品で構成されており、もちろんこの原料・配合に至ったのは長い歴史の積み重ねがあってこそなのでしょうが、いかにも腸に良さそうなラインナップではありますね。



内科・糖尿病外来

佐藤 潤一
さとう じゅんいち

て少ないシーズンになりました。さらに、2020～2021年、2021～2022年のシーズンは発症がほとんどなく流行は起りませんでした。この原因としては、新型コロナウイルス感染症対策で密を避ける、手洗い、マスクの着用などの予防策が徹底されたことがインフルエンザの発症を減らすことにも繋がったと考えられています。さらに、新型コロナウイルス感染症の水際対策として国際間の人の動きが極端に少なくなり、海外からインフルエンザウイルスが持ち込まれる機会が減ったことなども



インフルエンザ
は毎年12月頃か

ら3月下旬まで流行しますが、罹患者は1000万人以上、最悪の場合は死に至ることもある侮れない呼吸器感染症です。

さて、2019～2020年のシーズンは例年通り流行が始まりましたが、新型コロナウイルス感染症が拡大した途端に流行が収まり感染者が極

影響していると思われます。このような現象は世界各国でも報告されており、最近2年以上は世界中でインフルエンザの発症が殆ど認められていない状況です。しかし、既に報道されていますが、今年の4月頃からオーストラリアでインフルエンザの感染者が急激に増加し流行が拡大しています。

ところで、従来南半球のインフルエンザ流行状況が半年後の北半球における流行予測の指標になっています。その中でも、我が国ではオーストラリアの情報が最も参考になると言われています。これらのこと総合すると、今年の冬はインフルエンザの流行が起こる可能性が高いと予想されます。また、2019年のシーズンからおよそ3年間インフルエンザの流行が全く認められなかつたため、インフルエンザに対する免疫がない人が数多くいると推察されます。そのため、ひとたびインフルエンザが発症した際には、感染が急速に拡大してパンデミックになることも心配されます。もし、新型コロナウイルス感染症とインフルエンザの流行が同時に起これば、医療状況はさらに逼迫しますし、社会・経済活動にも影響を及ぼし非常に深刻な事態に陥ることも危惧されます。そのため、今シーズンはインフルエンザ対策をより厳重に行う必要がありますが、基本は流行が始まる前にワクチン接種を完了しておくことです。さらに、インフルエンザは感染力がとても強いため、家族がいる方は家族全員、職場など集団においても出来るだけ多くの方の接種が感染拡大防止に繋がります。

なお、ワクチン接種は毎年10月から始まりますので、早めに接種計画を立てるようしましょう。

ただいま

新病院建築プロジェクト コラムNo.12

きよせ 旭が丘記念病院 建築中



遂に『きよせ旭が丘記念病院』竣工となりました！！

8月24日の施主検査を経て、31日に無事引き渡しを終えました。左の写真は、きよせ旭が丘記念病院と織本病院、新旧病院が同時に建つ今だけの貴重な写真です^^

これから、医療機器や備品などの搬入や織本病院からの引っ越しを行い、11月1日の開院日に向けて、職員皆で力を合わせて準備を進めていきます！！

昨年11月、埼玉県秩父郡皆野町にある『天然木一枚板工房 ダイツリー』様へ出向き選んだスギの一枚板。理事と職員有志からの寄付により、この一枚板が1階受付カウンターに設置されました！（ダイツリー様訪問の記事は当誌2021年12月号に掲載）

無垢材でできた1枚板には、天然木の持つ独特の質感があり、圧倒的な存在感と重厚感が感じられます。木目もとっても美しく、温かみのあるカウンターが出来上がりました♪



専務理事 箕輪 比呂志

施設管理課長 山本 伸夫

定礎箱には、織本病院の沿革や新病院建築に関する記事を掲載している過去2年間分の月刊織本、さらに、高木由利理事長が2,000例を越える肛門外科手術で使用していた器具、曲がりペアンと守谷式クーパーを納めました。そして8月26日、無事定礎石を設置する運びとなりました。このタイムカプセル（？）が開けられるのは何十年後になるのでしょうか…